特別
へ5
6590
95

へ5
6590
95

京俳壇の新作家
東西に何ともなく
ともせず西方の家に風の義
義乃句選に
到底拙者
[illegible]

菊かよ、究園雑ふとよ難きう
存ことしかしまれ姪のう絵
下つきの画る穂ぬ古殿所見
をまむへ天生所天申しも
こそ其も思ふめのなうれ絵に

志あてまあの人にあしさま程
多くれをれとこし双紙ぬ出
持てを赤ゑをえの代とゆる

丙辰栁谷

重厚

芭蕉翁發句集

本吟 勧進巻頭

和歌の浦に詠ては出雲の八重垣
梅ゝ寒や上ゝ方ゝ京大内
古郷の梅や浪花の二年越
たゞ今さの風を君ゝ奉る春の月
道世話と死

雲と雨ゝ方ゝ方や庵の活ゝ面孔

芭蕉翁桜ゝ詠ゝ

ゝゝ桜ゝ桜ゝ詠ゝ歌の二首ゝ

精舎鐘ゝ聞ゝ

ゝ詠ゝ歌ゝ柳に伊勢屋

伊勢ゝ雲ゝ雲ゝ東ゝ武蔵

西ゝゝ京ゝ浦ゝ月ゝ

年月の面ゝ

年ゝ

青よみの大達多し山さくら
檜木のかし梨木の橋ノ轆や山風浦

覚

一ましち床　一升
一黒豆　一升
一あづき　五合
右之外今日之飯食に御中居
此以しせ傍若にも己世済ニし

夏の暮と一露二井ろう利
浪山をしゝ中ゆ根りまちし
流出するゝ人々
ナりる　有せ残

春八桜

題杜國

笠の跡ゟ柳館ろ旅生一の郡
照治付ゝのて出し

古寺や苔の落葉の拾ひたき

相生まつ

苔に感ある竹のうゝ小

山頭月挂雲門餅

屋後松煎趙州茶

仏法を陳ずるものの松

世界をもつて俳諧の変化とする

屋しと許す六〇七十二年中

俳諧を形容し俗語と雅

言をもつて出でしなるもの

古今集序に賞あるを吉とす百

あまり五の字の一言にて無限月花

十六夜

桃青

源氏孫

葉にそむく椿の花のまさごかな

嵐やな

郭の上二所の名れた　大悲岡

なの住　碑に加ふる　ますほ屋

春の夕やまさるこゝろ　永日や

寄る枝枯り　蕭条

上醒破了

冥土とて小仏なる山ざくら

ちるうらもう蔵業の芽　独活北

影しろ子

椿に逆ふ　ふるさと北

苣つゝ常紅なる女椿うら

逝水や椿ふるまる竹ふれる

日記上

此頃俳諧発句を[illegible]

[illegible]

其間無[illegible]

[illegible]

廿二

[illegible]

[illegible]四谷[illegible]常竹屋

[illegible]

毎一夜拙[illegible]本懐[illegible]

芭蕉翁を[illegible]時

[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]三笠山

初の門[illegible]

[illegible]

大[illegible]

[illegible]

[illegible]

苔[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七

[illegible]

恵賛

[illegible]

二百

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十七

[illegible]

子規なくや黒戸の濱ひさし

遠浅や浪の日の出の舟こゝろ

紫乃や一星をとる小山伏

楢山や柴して鹿る宣の每

雛およや駅路の鈴の耳すゞしく

曲水子の出状にもせら下居の宅

たゝ来りの指図とおのへてかし

ある日予のすまひにきて一の書を支考か

やつかれ頼にて余もかくれとも門に

仕ノ妻を活判

髑髏の画

夕風や盆挑灯も糊くさき

嵐雪か画に讃所望に付

誰かしる二百十日も和文　度

人は何某の像

村西を咨中を和を業於堀
新六郎
緒角山門も上るに茶の飯
李蘭玄来の二人
況弱く村とうまき学の居
名示八体
秋や須ケ丘や秋和の書日和
国武の風乃ものやや和竹の蒲
汀ケ丘や古井そうの笠山伏
果人今の中や筑ケ舞秋門
松ケ丘や玄の白乃玄ケ
姉ケ丘や時ケ丘ある雑ケ武
八郎や天の稽玄ケ和歌斗
ケ丘ケ舞ケ中代宿ケ作ケ
日ケ玄ケ舞ケ人ケ

七夕や祈すり捨る紙衣哉

高山寺の二人の芭蕉庵を訪ひて

古郷のあるじを吟

八千里の雲にかゝるや秋の雲

名月や鶏頭経て文を干

名月や二人の芭蕉葉のうらゝ

橙や伊賀の白子の店ゝ

淋しさや汀の蘆ちりゝ雪

幼住庵

蟬なくや寂滅為楽秋の山

蟬なくや木枯拾葉実乃ち

角拳や木枯を出羽の相撲ゝ

古郷の古実を語りて

月出の鉢叩の声ゝ

ゝちの〳〵ゝ

ゝや二度記すも蓬ゝ

大原法印にたまはる唐幸子
名月や東の方の門徒坊

傘下社中にて
原なる蛾眉に嵐の吟かな
あるじ
春雨や新酒の焼酎
三原社

雨の音や新酒の焼酎乃売
川舟やこの糸太酒よい月夜
秋の雨
秋の雨の屋根をさゝ
ばらさゝ社中の一句
中秋のこゝ京都に歩行石
月ゆゑ涙こぼるゝ海社中

岩穴の世すてゝ隠るゝにかゝる身を
蔦の葉の海をかゝへめぐる外

新麦一斗筆二本油のやうな
酒五斗ゝ豆腐の法
蕎麦形一三二小麦粉二百文五
ゝ
水油なゝて高夜や宮の月

一疋のゝ馬ゝ川千ゝ

竹庵ゝ士行

本枕乃油めゝやゝるのゆゝ
絵ゝや宮ゝ入日の新ゝき
四五月や舟の帆つゝゝ元ゝ
芭蕉行の夜や二法の言あゝ礼
鶯の声ゝ高ゝ　年尾ゝ郎

画賛

月雪や海うら親の小松うら

あるかのもとうら大福汁

うりうりと出るうら人やふる磨

硯あむ高砂の法師うら巨燵うら

ふるもの雪ふるうら鉢うら

乾鮭や何うら屋うら老人

年寄れ二人ぶる〳〵嘘の郡

家ふるき奴僕あるかの

聖の教ふるる

笑ふのうら悔むや河豚汁

枕屏風むかふ書いて刈染合

お居〳〵福ます世今〳〵秋

ずしと世界てるる

杉風様　　　ばせを
此ほとゝ様
以上所出来しし候て去大根
一休々去寛舞年乃市
冬の里や世ゝ一名の風の音
々年ゝ以前人ゝてゝ

宗祇路て随波ひくと送て候事
以上
ハ此御中御座鉢字流
古尾形の孫足下其面名を
三人ホの一幅可得可しき字一枚
日本由此出てそこ足文京都上
此男神も小野篁大炊氏七十し

昨日は清話終日之慰ニ清
猶とくとく醍醐門跡大僧正より
あまり和哥も出来申候ハゞ可被
指越候

廿日

素堂先生

芭蕉庵

大宮や深き心を住薮の中
亭の竹筆つくしる君ありて
世ゝの〇や藤葉まで広き文梅のはな

戊戌冥捉一正斎書

風雅より西行法師あり祖義あり金吉社
此あり元文の学この撰集庵の
何ぞ一代の句を集め句撰とする
もむかし実盛乃京を発する夫れ
を礼拝の際を捨て西宗の吟
あり事の事は秘する事
於領分主の如し小倉の
立所あり名所を得て世を

義経を始め新田義貞の新田神社
一所を主のしく桜あり
もあり世に沙もふることを
梅宗仏を沙の魂を祭る賀茂仏
堂塔を繁く京を京志れ
ゝ嵯峨乃嵯峨ゆるる事

天明七年神を　今日菴
　　安代仲

常州鈴廉部小邑　天野多五衛殿奥ニテ

大寒ニ須賀鳥笑子ト雪ヲ焙遣遊ス

茶のせうに餅はうまそ雪の月　和角

餅菓子ゆゑ雪の月ゆゑ　支考